参考資料３

環境学習・教育に関する取組事例

（１）海外での取組例

①　アースエデュケーション

1970年代半ばにアメリカでスティーブ・ヴァン・メーターによって提唱された。環境教育が自然体験活動や野外活動と混同され、きちんと機能していないことに問題意識を持ち、従来の環境教育のオルナタティブとして打ち出されたもの。エネルギーや物質の循環、相互関係、変化等の概念を理解し、自分自身のライフスタイルの問い直しにつなげていくことを目指している。個別の生き物に焦点化せず、カテゴリーとして捉えることで概念を具体化するための体験が重視されていることが特徴。地球教育研究所によりその概念と年齢ごとに作られたプログラムが世界に広げられている。アメリカのみならず、カナダ、イギリス、オーストラリア、イタリア、フィンランド、ドイツ、オランダ等でも取り組まれている。

日本では、広島で小学校５年生を対象とした「アースキーパー」というプログラムを実践。森の中での自然体験を通じて循環やつながりといった環境の概念を理解し、そこで理解したことをもとに家や学校に帰ってから日常生活を見直すという流れがストーリー仕立てで展開する。この取り組みは、広島ホームテレビによって番組化された。

②　アースワーク

1960年代の後半、米英を中心に登場した実験的なアート。美術館やギャラリーといった展示空間の中で展開されてきた美術を野外に持ち出すことによってより広大な地球環境に向かい合わせることを目的とした芸術である。砂漠、山岳、海岸など広大な土地を素材にし、大地の堀削や意思の積み上げなど、それらに直接はたらきかけることによって、大規模な構造物などを制作した。これらは、ランド・アート、アースアートとも呼ばれる。

③　ネイチャーゲーム

1979年、アメリカのコーネルによって考案された自然とふれあうアクティビティを集めたプログラムである。さまざまな感覚で自然を感じ、心と体で直接自然を体験することによって、自然とのつながりを認識したり、自然から得た体験や感動をわかちあうことの重要性を無意識に気づかせる内容になっている。日本では、公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会が普及活動を行っている。

④　プロジェクト・ウェット

プロジェクト・ウェット（WET:Water Education For Teachers）とは、水や水資源に対する認識・知識・理解を深め責任感を促すことを目標として開発された「水」に関する教育プログラムである。教える側が単に知識を与えるのではなく、子どもたち自身が活動を通じ、「水」そのものや、その大切さや重要性に気づき、学んでいく。プロジェクトWETインターナショナルの本部はアメリカ・モンタナ州に置かれており、日本においては公益財団法人河川財団が2003年から事務局として普及と指導者養成を行っている。

⑤　プロジェクト・ラーニングツリー

1973年、アメリカの森林財団と西部地区環境教育協議会が開発した環境教育プログラムである。身近にある木や森での体験を通して土や水、空気といった自然環境から社会にいたる環境全体について学ぶことを目的として開発された。幼稚園から高校生までを対象とし、自分達の周りの複雑な環境について、「考える内容」ではなく、「考え方」について学ぶといったところにポイントが置かれている。日本での認証は、NPO法人国際理解教育センター（ERIC）が所有し、日本語訳やテキストの出版、指導者の育成などの普及活動を行っている。

⑥　プロジェクト・ワイルド

1983年、アメリカの西部地域環境教育協議会と西部地域魚類・野生生物局協会が協働で開発した環境学習プログラムである。「自然を大切に」と理解するだけでなく、「自然や環境のために行動できる人」を育成することに取り組んだ野生生物を題材としており、野生動物そのものではなく、生息地に焦点を当てることで環境を考えていこうとするところに特徴がある。

日本では、1999年に導入され、一般財団法人公園財団が普及と指導者養成を行っている。

⑦　森のようちえん

園舎を持たず、一日の多くの時間を森で過ごす「森の幼稚園」は、20世紀半ばにデンマークに誕生したと言われており、ドイツでもその取組が広がっている。子どもたちが五感を使って自然を体験すること、そしてそのためのプログラムの柔軟性を重視しているとされる。

国内でも同様の取組を行う団体が増えており、平成20年には「森のようちえん全国ネットワーク」が発足している。同ネットワークでは、「森」は森だけでなく、海や川や野山、里山、畑、都市公園など、広義にとらえた自然体験をするフィールドを指し、「ようちえん」は、幼稚園だけでなく、保育園、託児所、学童保育、自主保育、自然学校、育児サークル、子育てサロン・ひろば等が含まれ０歳から概ね７歳ぐらいまでの乳児・幼少期の子ども達が集団で活動する場を指すとしている。

（２）国内での取組例

①　群馬県「ぐんま環境学校（エコカレッジ）」

群馬県では、環境活動に自ら進んで取り組むことができる人材を育成するため、環境問題に関連する多数の分野のカリキュラムによる「ぐんま環境学校（エコカレッジ）」を実施している。

ぐんま環境学校では、公害防止や気候変動、エネルギー、リサイクルなど、環境の基礎を幅広く学ぶことができ、環境ボランティアの取組を学び、実際に活動しているボランティアの方々と交流することもできる。

修了生は、環境に配慮した生活への見直しや、地域の環境活動やボランティア活動に取り組みはじめるなど、個人や団体で様々な活動を実践している。

＜定　　員＞　　30名
＜講義内容＞
◇基礎講義
・環境学習の進め方、森林ボランティアの取り組み
・水質・大気保全、放射線対策、各種リサイクル法について　等
◇フィールドワーク・実習
・育樹作業（森林整備の体験）
・施設見学、リサイクル実習　等

②　愛知県の取組

ESD世界会議の開催地として、愛知県では名古屋市や地元経済界、教育関係者等と共に「ESDユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会」を設置し、ESDの普及啓発や様々な取組の促進などを行っている。また、県独自の取組として持続可能な地域づくりの最前線である市町村でESDを促進させるため、平成25年度に、県内外の先進事例の視察やテーマ別グループワークなどからなる「自治体職員のためのESD セミナー」を実施し、その成果をハンドブックに取りまとめた。

一方、平成25年２月に作成した「愛知県環境学習等行動計画」で、連携・協働の強化を施策の柱に掲げたことを踏まえ、環境学習について相談される方の希望に応じて、環境学習プログラムの実施や講師の派遣等について他の団体等と調整・橋渡しを行う「環境学習コーディネーター」制度を同年５月に発足。

さらに、県内の環境学習施設等の連携・協働促進のため、平成20年３月に設置した愛知県環境学習施設等連絡協議会（Aichi Environmental LearningNetwork、通称AEL(あえる)ネット。）を拡充し、各施設が連携して、持続可能な社会づくりの担い手となる「人づくり」に取り組んでいる。

③　岡山県「学生のための環境インターンシップ事業」

岡山県では、持続可能な社会の構築に向け、身近な環境問題に関する様々な体験を通じた環境学習の推進をすることを目的に、環境学習指導者としての素養と意欲を持つ大学生を募集し、環境学習出前講座等の活動を行う環境団体等における研修や実践活動の経験をする。実践講座修了後、レポート等により最終テストを行い、各講座成績と合せて指導者としての適否を判断し、講座修了者の認定を行う。

＜募集人数＞　　10名程度
＜講座内容＞
◇基礎講座（全３回）　期間：５月～６月
環境学習指導者として基本的な知識と実践につながるスキルを専門家から学ぶ。
◇応用講座（３回実施）期間：６月～８月
実際の出前講座を利用し、参加者はOJT形式で講師のサポートを行う。
◇実践講座（１回実施）期間：７月～９月
出前講座のメイン講師として、実際の出前講座プログラムを受け持つ。

④　北九州市の取組

北九州市では、公害克服の技術と経験を生かし、環境国際協力や循環型社会づくりを進めるとともに「世界の環境首都」を目指したまちづくりを行っている。

環境学習・教育の取組としては、恵まれた自然や充実した環境関連施設、さらに蓄積した環境の取組等を環境学習素材として結び付け、エコツアーなどまち全体で多世代が楽しく学べる仕組みづくりを行う「北九州みらい学習システム」の推進や、市民の環境についての学習機会を増やし、環境意識のレベルアップや環境に関心を持つ市民の視野を広げることを目的とした「北九州市環境首都検定事業」などを実施している。

⑤　公益財団法人　キープ協会（山梨県）の取組

多様性に富んだ山梨県清里の自然を活かし、専門知識と経験を備えたレンジャーが、数多くの環境教育プログラムを開発・実施している。プログラムの内容は、子どもを対象にしたものから大人向けまで、30分間という短時間から宿泊を伴うものまで、多種多様である。

2010年から毎年開催している「つなぐ人フォーラム」では、150名近くの参加者とともに、様々なプログラムを実践している。

（３）県内での取組例

①　北摂里山博物館構想における取組

こども北摂里山探検隊

北摂地域には、今も炭や薪の生産活動が行われている本来の里山「伝統的里山」と、荒廃から再生され、環境学習など新たな利活用が行われている「先進的里山」が点在し、国内の他地域には見られない特色を有している。

北摂の地域資源であるこれらの里山を活かし、住民、事業者、学識者、行政等で構成する「北摂里山博物館運営協議会」のもと、「こども北摂里山探検隊」や「北摂里山大学」により、子どもから大人まで各世代に対応した環境学習を展開し、里山の持続的な保全と地域の活性化を図っている。

②　いなみ野ため池ミュージアムにおける取組

東播磨地域を象徴する「ため池群と水路網」及びその歴史的・文化的資源を地域の財産として守り、活かし、次代に継承するため、農業者、地域住民、事業者、実践活動団体、教育機関、行政など多様な主体の参画と協働のもと、地域全体を“まるごと博物館”とする「いなみ野ため池ミュージアム」を展開している。

かいぼり（池干し）体験

その取組の一環として、小学校の環境学習や社会科学習と連携し、かいぼり(池干し)や施設見学など体験型の「ため池学習」や「疏水学習」を展開している。

また、次代を担う子どもたちの「ふるさと意識」醸成につなげるためのモデルとして、ため池協議会など地域と小学校との連携により、６年間を通じて継続的に学習する「ため池教育プログラム」を実施している。

③　コウノトリ野生復帰推進計画における取組

野生復帰体験講座

但馬地域では、住民、団体、学識者、行政等で構成する「コウノトリ野生復帰推進連絡協議会」が中心となって、コウノトリと共生する地域づくりが展開されている。

コウノトリと共生できる環境が人にとっても安全で安心できる豊かな環境であるとの認識に立ち、様々な主体の参画と協働により、ガイドウォークや特別観察会、野生復帰体験講座など、コウノトリを核とした環境学習・教育が、普及啓発の一環として展開されている。

④　山陰海岸ジオパークにおける取組

豊岡総合高等学校インターアクトクラブによるジオサイト（見どころ）の清掃活動

山陰海岸ジオパークでは、日本列島がアジア大陸の一部だった時代から、日本海形成の過程を経て現在に至る山陰海岸の貴重な地形・地質遺産をはじめ、多彩な自然を背景にした人々の文化・歴史を体験・学習することができる。平成 22 年 10 月、ユネスコが支援する「世界ジオパークネットワーク」への加盟認定（平成 26 年 9 月再認定済）を経て、ジオパークの理念である「保護・保全、教育、持続的発展」を図るために、貴重な地形・地質遺産を保護・保全しながら、ジオパークに関する学習や、観光・産業などの活動の持続的な発展を推進し、地域を活性化する取組を行っている。

特に、円山川流域の湿地とコウノトリの関係は、地形・地質と生態系との関係を示す好例であり、コウノトリの保護活動から湿地の保護活動に、そして地域の活性化につながっている。

⑤　ひょうご環境体験館「動く環境体験館」

太子高等学校での出前授業
「里山の動物たちと人のふれあい」

県が平成 20 年に開設したひょうご環境体験館（佐用町）では、環境問題について楽しみながら学び、理解を深めるための環境学習プログラムを実施している。これまで主に館内で実施してきたプログラムに加え、関係機関等と連携し、幼稚園、学校や地域で出前型の環境学習プログラムを実施している。

⑥　県立ささやまの森公園における取組

県立ささやまの森公園（篠山市）では、四季に応じて様々なイベントや体験プログラムを展開している。ボランティアの皆さんによって里山を守り育てる活動や、森林・水辺の動植物調査などによる大人向けの生態学習、子ども向けの環境学習などの体験プログラムが用意されている。また、平成 20 年から「森の学校」を開校し、子どもたちのたくましく生きる力を育てようと、生きもの観察、間伐体験など１年間を通して 10 回のプログラムを実施している。

⑦　県立有馬富士公園における取組

県立有馬富士公園（三田市）では、自然体験や生き物の観察に最適な施設や、日本の伝統的な住まいや暮らしを伝承するかやぶき民家があり、これらを活用した様々な自然体験プログラムが用意されている。棚田では稲刈り体験や、子どもたちの環境体験学習が行われている。

また、地域の自然や生き物の生態を楽しく学ぶことができる自然学習センターには、三田の自然をテーマに、見る、聞く、触るなど、五感を使って感じることのできる展示（常設展・企画展）がある。

⑧　尼崎 21 世紀の森構想における取組

尼崎市臨海地域で、市民や企業、団体、行政等の参画と協働で、100 年かけて、森を中心にしたまちづくりをしようというプロジェクト。平成 14 年３月に策定。

尼崎の森中央緑地では、種子から育てる「森づくり」体験や大きくなってきた森の生き物観察など、小学生向けの環境学習やイベントを実施している。平成 26 年４月には、この取組をさらに発展させるため、小学校向けのシラバスの配布や、100 年の森の成長を描いた絵本を作成した。

⑨　豊岡市立城崎小学校（H27 ｸﾞﾘｰﾝｽｸｰﾙ表彰校）
「守れ！ふるさと城崎の自然と環境　知り・学び・考えそして行動」

昭和 60 年度から取り組んできた小学校の児童会と域自治会で行うクリーン作戦が、中学校の生徒会のクリーン作戦とタイアップし、「城崎プロジェクトＣ」と称して、６年前から３者合同の地域クリーン作戦を実施している。また、ラムサール条約認定湿地である「戸島湿地」が学校の近くにあるため、人とコウノトリの共生、人と自然の共生をもとに、コウノトリの生息環境を中心とした戸島湿地の保全活動を行うとともに、絶滅危惧種であるヒヌマイトトンボの生息環境調査等、学年の発達段階に応じた取組を計画的、継続的に実施している。

また、一昨年から、全学年の環境学習のカリキュラを校内で見直し、ふるさと教育の視点を持った環境学習カリキュラムの再構築を図っている。こうした活動を通して、地域を知り児童の郷土を愛する心を育て、自分にできることを考え行動する態度を養っている。また、「ふるさと城崎」の素晴らしさの再発見や環境保全に対する意識の向上により、郷土に誇りを持ち、未来を創造する力を育む教育を推進している。

⑩　南あわじ市立三原中学校（H26 ｸﾞﾘｰﾝｽｸｰﾙ表彰校）
「よみがえれ！“ホタルの里”」

幼虫放流会

理科部員が中心となって“ホタルの里”の復活をめざし、43 年前から蛍の人工飼育・放流活動を継承している。産卵箱等の準備から幼虫放流と観察を続けながら蛍の飼育を行っている。また、地域住民を光りと幻の世界に誘う「観蛍会」を開催することで、環境保全を啓発し、地域コミュニティづくりにも寄与している。

⑪　県立洲本実業高等学校（H26 ｸﾞﾘｰﾝｽｸｰﾙ表彰校）
「持続可能な未来社会へ－あわじ環境未来島構想－」

クロスフロー風車作り

人口減少等の課題に直面する淡路島において持続可能な地域づくりを目指す「あわじ環境未来島構想」の推進に寄与する取組を行っている。地域に「街路灯」が少ないという地元の要望を受け、地域との共同研究会を立ち上げ、生徒の発案による微風でも起動できる風車（クロスフロー風車）を開発し、「街路灯」を設置している。また、別の地域では、生徒は農業用水が豊富であることに着目し、水車発電による「街路灯」を設置し、防犯灯や非常灯としても利用が期待されている。

⑫　神戸大学　内海域環境教育研究センターの取組

海洋生物の保全の立場から教育・研究・調査を展開している。淡路島の臨海実験所「マリンサイト」は、豊かな海の生物多様性のアクセスしやすい場所に立地し、安全で効果的に海の教育プログラムを実施するノウハウを持った施設である。また、学外に向けても、「全国公開臨海実習」という学生向けのプログラムを約 40 年にわたり実施している。

⑬　西宮市の取組

平成 15 年に全国初となる環境学習都市宣言を行ったことを契機に、環境関係条例の体系整備や環境計画の見直しを行うとともに、環境まちづくりを推進するべく、市民・事業者・行政等の多様な主体の参画と協働で議論を行う場として、「環境計画推進パートナーシップ会議」や「エココミュニティ会議」などを設置し、各会議間で情報・意見交換を行う交流会も実施している。

また、地域・家庭・学校をつなぐ「エコカード・エコスタンプシステム」の全市展開や、約 20 団体の協働による ESD を意識したまち歩きを通じて地域を学ぶ「にしのみやふるさとウォーク」、新任教員・保育士を対象に ESD 研修を毎年実施し、保育所・幼稚園・小学校への環境学習サポートガイドブックを配布している。これらの諸活動を、NPO 法人こども環境活動支援協会（LEAF）などとの協働で推進しており、LEAF では、商工会議所と連携した「持続可能な地域づくりサポート基金」の設置や防災・環境教育など地域理解を支援するためのホームページの開設、地元大学院との協働によるアジア留学生への ESD プログラムの実施なども行っている。

⑭　生活協同組合コープこうべの取組

環境学習用 DVD・紙芝居

コープこうべでは、くらしを守るという生活協同組合の目的にそって、環境問題解決のため全力を尽くすことを誓う「コープこうべ環境憲章」のもと、環境保全への取組を推進している。事業活動における環境負荷を低減するため、CO2 削減・省エネ・廃棄物削減・リサイクルの取組を進めるとともに、「お買い物にはマイバッグ」を合い言葉にマイバッグの持参を呼びかけている。また、兵庫県漁業協同組合連合会と連携した「ひょうご地魚推進プロジェクト（とれぴち）」、組合員による環境学習用の DVD・紙芝居の作成、コープの森・社家郷山での自然体験、田んぼなど生産現場での体験学習など、くらし方や食の選択が地域の第一次産業やその背景にある環境と密接につながっていることを学び、体感する取組を進めている。

⑮　明石のはらくらぶの取組

環境体験学習でつなぐ「身近な自然」と「人の輪づくり」を目標に、身近な自然の存在に気づき、興味・関心を持つことで自分の住んでいる地域を大切に思う心を育てたいとの思いで活動している。明石公園で自然観察会の開発と実施や、山、川、ため池、海といった水でつながる東播磨ならではの自然環境や小さな生命のつながりを生かしたオリジナルプログラムを提案し、学校と地域・行政・専門家等が連携・協働するネットワークづくりの支援を行っている。